研究論文

初めて不登校生徒を担任する教師と生徒をつなぐということ

新川　貴紀

北翔大学　人間福祉学部　福祉心理学科

抄　録

本研究では初めて不登校生徒を担任する中学校教師とスクールカウンセラー，相談室に登校するようになった不登校生徒との関わりの記録と，生徒の教室復帰後の担任教師へのインタビューを基に，新人教員への支援を通した不登校生徒への関わりを検討した。その結果，教師が理想としていた生徒への関わり方や，不登校生徒へのイメージが変容していく可能性が示唆された。またスクールカウンセラーとして他教員と協働した新人教員へ支援の有効性が示唆された。

キーワード：不登校，新人教員，スクールカウンセラー，協働，養護教諭

Ⅰ．問題と目的

文部科学省[1]によると平成21年度の小・中学校の不登校児童生徒数は約12万２千人であり，在籍児童生徒数に占める不登校児童生徒の割合も1.15%となっている。この割合は前年度よりも減少しているが，平成10年度の1.06%から現在まで１%を下回ってはいない。

また「指導の結果登校する又はできるようになった児童生徒」に特に効果のあった学校の措置としては，「電話をかけ迎えに行く」，「家庭訪問を行い，学業や生活面での相談に乗る」などが上位となっている。一方，「教師との触れあいを多くするなど，教師との関係を改善した」という学校も小中併せて6,000校近くあった。

反対に不登校となったきっかけと考えられる状況として「教職員との関係をめぐる問題」との回答は複数回答ながら２%近くあった。このようなことから不登校児童生徒の支援や予防のために教師の果たす役割は非常に大きいと思われる。

教師に目を向けると，文部科学省[1]によると平成21年度在職者数に占める病気休職者数は0.94%となっており，そのうち精神疾患による休職者数は63.3%となっている。教育職員のメンタルヘルスの保持は現在重要な課題となっており，文部科学省でも取り組みを整理しているところである。

病気休職者の割合は各年代で大きくは変わらないものの，新人教員のうち１年間の試用期間中にやめ，正式採用にならなかった人数は317人であり，そのうち依願退職が302人であった。依願退職の中でも83人が精神疾患を理由としていた。

落合[2]は教師のメンタルヘルスやバーンアウトの特徴を整理し，日本独自の教師文化の重要性を指摘している。日本の教師集団は，「学級王国」という言葉に象徴されるような独自の職場システムを持っている。また，「新人でも一人前扱い」といった文化もあり，これらは教師バーンアウトの背景と考えられる。

これらのことから，教師の中でも特に新人教員へのサポートという視点も，不登校児童生徒への支援のために，学校全体のシステムとして議論される必要があるだろう。

また不登校児童生徒の支援に担任以外の教師として大きな役割を果たすものとして養護教諭が挙げられる。保健室登校を登校の一形態として認める学校も増えている現在，保健室登校児童生徒への対応に関して養護教諭が持つ悩みや意識についても検討されている。伊藤[3]はスクールカウンセラー（以下 SC）との協働に注目し，調査を行った結果，SC が配置された学校では，保健室登校の人数が多いが，対応上の不安は小さく，養護教諭の相談活動満足度が高いことを明らかにしている。

心理臨床の専門家としての SC の最も重要とされる役割の一つとして不登校児童生徒や担任教師，養護教諭などをつなぐ役割があると言えるだろう。SC に限らず心理臨床の場は面接室による一対一の場から様々なコミュニティに広がっている。それぞれの場で心理臨床家としてより良い「つなぎ手」とならなくてはならない。最終的には心理臨床家が存在しなくてもそのコミュニティが

問題を持つとされる人にとって効果的に働く必要がある。

そのためにも心理臨床家は様々な立場の人がどのような考えを持っているのかを想像しなければならない。様々な考えに対してそれぞれの声として耳を傾けようとする努力と想像力が重要であろう。野村[4]が私たちの存在が多声的であると指摘するように，心理臨床の世界も多声的であり，それらを事例として記述する時には多声音楽（ポリフォニー）となるのではないだろうか。

そして心理臨床家はそれぞれの声をできるかぎり綺麗にあわせる役目を担う。さらに村瀬[5]は「つなぐ」とは単に，社会空間的要素をネットワーキングしていくということにとどまらず，①クライエントの内面の世界と現実の世界を「つなぐ」ということ，②クライエントのものの見方，感じ方や体験をわれわれのそれらと「つなげていくこと」，③クライエントのうちに分断されている歴史，時間を「つない」で，将来への展望を探すこと，④クライエントが本当に求めていることとそれを助ける手だてとを「つないで」いくこと，⑤クライエントに関わりを持つ機関の中や，その機関に関連のある人々とどのように「つないでいくか」，⑥治療者個人の中に生じてくるさまざまな感情と考えをどう「つないで」いくのか，⑦治療者の感性がとらえたものと，治療者や機関の役割とをどのように「つないで」いくか，であるとし，それらを治療者が問われているとしている。

本研究は学校というコミュニティのなかで，SCとして心理臨床家が，初めて不登校生徒を担任する教師と生徒，保護者や養護教諭との間で，より効率的・効果的に働く事，より良い「つなぎ手」となることを意識した試みをSCの活動の記録と担任教師へのインタビューから検討するものである。担任教師へのインタビューはSCが支援の過程で深く追求をしていなかった教師の信念や理想と，その変化を明らかにし，SCの記録からうかがえることを裏付けることを目的としている。

これらのことから本研究では新人教員と不登校生徒の支援の一つのあり方を提示することを目的とする。

Ⅱ．方　　法

1. 事例の概要

本研究に主に登場するのは中学校教員のA先生とその担任クラスの生徒BさんとDくん，そして養護教諭のC先生である。SCは週一回月曜日の8時間（10時～18時）に勤務していた。

A先生（担任教師）

20代半ばであり，私立の中学校で教員経験（担任は持っていない）のあと現在の勤務校に移る。SCが関わったのはA先生が現任校に来て2・3年目の時であった。A先生は1年目は1年生のクラスを担任し，2年目になりクラス替えがあった2年生の担任となる。3年目は同じクラスの担任として勤務する。現任校に来て初めて担任として学級を持つことになったが，1年時は不登校の生徒などはいなかった。

テニス部の顧問であり，学生時代もテニスサークルに所属，細身であるが声量はあり，生徒にも気さくに声をかける教員である。

Bさん

中2よりA先生の担任クラスとなった女子生徒。家族構成は父母と姉であり，姉は成人しているが知的障害があり，授産施設に就労中で同居はしていない。父はトラック運転手をしているが仕事が不定期で収入が不安定であり，現在は父母とBさんはアパートに暮らす。Bさんの部屋はなく母親と同じ部屋で就寝する。

中1の途中から不登校となる。当時は学校では誰に対しても言葉を発することがなかった。小学校時代はほとんど休まずに登校。中1の終わりには前任のSCがいる相談室に登校するようになり，その後もSC勤務日以外にも登校する。相談室内でSCとの会話をするようになり，同時に養護教諭との会話，担任教師との会話をするようになる。当時中3の相談室登校中の女子生徒との関係が良く，相談室内でいろいろな話をしていたようである。

中2になりSCも交代となり，週に1回関わるようになる。仲の良かった女子生徒は卒業し，相談室内で話が出来る相手がいなくなる。

C先生（養護教諭）

40代半ばの養護教諭。現在の中学校に勤務して10年となる。以前は小学校の養護教諭として勤務する。SCが勤務場所としている相談室は保健室と職員室の間に位置している。相談室に来る生徒，またその他の非行傾向がある生徒や不登校傾向の生徒についての情報の多くを把握している。その他にも休み時間などに多くの生徒が保健室を訪れて話をしている。Bさんは1年次よりSCがいない時には保健室に行く事が多く，家庭のことなどの話をしていたようである。

Dくん

中2よりA先生の担任クラスとなった男子生徒。母子家庭であり，弟は小学4年生。中学校入学後から学校で

話をせず場面緘黙となる。また左足を曲げずに歩く。中学入学後に同級生とぶつかった後から左足が曲がらなくなる。横断歩道やスーパーなどでしっかりと歩いていたという学年の教師の目撃情報もある。

授業はノートを取らず，テストも白紙という状態で，好きなアニメのキャラクターの絵を描いて過ごす。１年時は別の担任であり，特別支援の必要性を感じ母親との関わりを持つが，そのときに母親と担任の間で意見の違いがあったようで，学校とは協働体制とは言えない状態が続いている。

2. 検討資料

１)．SC の記録

SC の日々の記録をより具体的な記述となるように加筆して用いた。

２)．担任教師へのインタビュー

インタビュー手続き

Ａ先生がＢさんやＤくんとの関わりの中でどのようなことを感じていたのか，初めて不登校生徒を担任したことにより何を考えたのかを確認するため，半構造化面接により，ＢさんやＤくん卒業間近の２月末にインタビューを行った。インタビューは放課後の相談室で行われ，時間は約１時間半であった。インタビューアーは語り手の自由な語りを促進するように努めた。

分析手続き

インタビューを録音し，語られた内容を文字化したものを１次資料として用いた。語り手の信念や理想が実際の関わりにどのように影響していたのかに注目し，特徴的と思われるテーマを抽出した。

結果の記述

結果の記述には，分析者の主観的把握が不可避的に大きな影響を与える。本稿では一人の教員の語りのみを分析対象として扱っており，筆者の影響が一切ない，教員についての客観的，一般的な記述を目指したものではない。新人教員の体験理解のための一つの視点モデルである。その意味で，本論の結果は一つの仮説として継承されることが望ましい[6]。

なお，教員・語られる人物のプライバシーに配慮して，論旨を損なわない範囲での改編をおこなった。

Ⅲ．結果と考察

1. 経過の概要（SC の記録より）（１年目）

１)．相談室におけるＢさん（中２）と SC や他生徒との関わり

複数の生徒が相談室登校をするようになったが，はじめはＢさんのみが相談室に登校していた。前任の SC との関係もあり，SC との関わりに抵抗は見られない。将来お笑いタレントになりたいと話し，お笑いタレントになるために専門学校に行かなければならないこと，すでにコンビ名も決めていることも教えてくれる。またアニメや漫画も好きでキテレツ大百科やドラゴンボールが好きであるとのことである。SC の要求にこたえ，漫画に出てくるキャラクターの絵を書いてくれるなどする。SC との一対一の場面では聞かれたことにほとんど答えることができるようになる。

当初は週一回の登校で時間も午後からであったが，SC が来る曜日には10時前に登校し他の生徒が帰った後に下校するようになる。また SC の勤務曜日以外にも登校を始める。一人で相談室にて過ごすが，養護教諭のＣ先生が顔を出してくれたりし，授業のプリントを一人で少しずつであるがこなすようなる。この時期に２年生の宿泊学習は行きたいと言っていたＢさんであったが，結局は準備の段階から教室に入ることは出来ず，参加は出来なかった。

その後他の不登校生徒も相談室登校をするようになる。不登校であったＥさん（中３女子）が登校を始める。別室で SC との面談をする。SC が勤務日のみの登校であったが，その後の日程にも登校を始め，定時制を受験し合格。

ある日 SC 勤務日以外にＢさんとＥさんが相談室で一緒になることがあり，ＢさんはＥさんにプロフィール帳を書いてもらいたいと渡す。Ｅさんは直接渡すことは出来ず，Ｂさんはその後どうなったかを気にしていた。その後 SC がＥさんから受け取りＢさんに渡す。Ｂさんは教室には入れないものの，他者との関わりは求めていることがわかる。

プロフィール帳を渡したのもＢさんにとって精一杯の関わりだったのであろう，Ｅさんの書いたものがなかなか帰ってこなかったＢさんの残念そうな表情，受け取った時の嬉しそうな表情から伺えた。しかしＥさんは別室にて美術の課題などをすることを選び，その後Ｂさんとの関わりはなかった。

２学期に入りＢさんと同じクラスであり，Ｇさん（中２女子）が相談室に来るようになる。母子家庭であるが母親が病気がちで，近所に住む祖母に面倒を見てもらっている。１年次後半から欠席が増え，担任のＡ先生との面談を行っていた生徒である。Ａ先生はＧさんの友人関係における不器用さを認識していたようであった。Ｇさんは登校した時にはほとんどの時間教室に入ることができていた。欠席を減らすためにも，毎日登校し教室に入

ることができない時には相談室で過ごすことになる。

相談室内ではＧさんはＢさんと同じクラスということもあり，積極的に話しかける。しかし話の内容はＧさんの携帯電話のパケット通信料が今月はどの程度であったとか，他の友人とカラオケに行ったことの話であり，経済的に豊かではないＢさんにとっては関心を持ちたくても持てない話であった。そのためかＧさんとの会話は一方的なものとなっているようにSCには見えた。

その後も同じクラスの欠席がちなＨさん（中２女子）がＧさん同様に相談室に午前中や，お昼休みのみ顔を出すようになる。ＨさんはＧさんと携帯やカラオケの話で盛り上がり，Ｂさんは疎外感を感じているようにSCは感じた。

ＧさんやＨさんが午後から教室に戻ると，「携帯も持っていないし，カラオケにも行けない」とＢさんは漏らす。

ＧさんやＨさんの存在はＢさんにとって自分自身の家庭環境に対する不満を増大させるものであると思う一方，教室に戻る際に二人の存在は大きいと思われるため，SCとしては３者の関係をうまく生かせるようにしようと考えた。

ほぼ同時期にＩさん（中１女子）が相談室登校を始める。ＧさんとＩさん，そしてＢさんが相談室に３人でいる時間が増えたが，ＧさんとＩさんはカラオケの話や男性アイドルに関する話で盛り上がり，そこでもＢさんは話しについて行けないという様子であった。SCとしてはその３人の会話に入りながらも，Ｂさんも話題に入れる会話が出来るように試み，できなかったとしても後からＢさんをフォローするように努めた。この頃はSCを含めた四人で給食を食べることも多かった。

２）．Ａ先生のＢさんに対する関わり

Ａ先生は学級担任として，授業がない時間には相談室を訪れてくれた。しかしＢさんがいることを知っているため，相談室にノックもせずに入ってきて「今日も教室には入れないのか，いつなら入れるんだ」などと一方的な会話であった。

ＢさんはＡ先生の働きかけを受け，萎縮しているように見えたが，Ａ先生はそのことには気づかずに対応を変えることなく毎回同じような関わりであった。SCとしては，そこでいかにして間に入り二人のコミュニケーションを円滑にするべきか迷う時間であった。Ａ先生はＢさんへの対応について悩んでいるという様子はなく，職員室内でもＢさんへの対応について話題に上ることはなかった。SCとしてはＡ先生にＢさんの気持ちをいかに理解してもらうか，そしてどのようなタイミングでどのような言葉で伝えるべきか，またはＡ先生のプライドを傷つけないような方法で伝える術はないかを考えながら時間が過ぎた。

ある日職員室の雑談の中でＡ先生は漫画のドラゴンボールが好きであることがわかった。SCは２人の関係を構築するための手段としてドラゴンボールを利用できるのではないかと考えた。その後Ａ先生がこれまでのようにノックもせずに入ってくると，その後始まったＡ先生からの一方的な会話を遮るようにSCは漫画の話題を持ち出した。「Ｂさんはドラゴンボールが好きみたいですよ」と伝えると，Ａ先生は「おーお前もドラゴンボールが好きなのか，めずらしいな。先生は全巻もっているぞ」というような会話が始まり，一瞬であったＢさんにも笑顔が見られた。そしてその後も漫画を貸す約束もしていた。教室に入るかどうかという内容以外の会話が行われた初めての瞬間であった。

2. 経過の概要（SCの記録より）（２年目）

Ｂさんは３年生になった。１年生から２年生になったＩさんは教室に入れるようになり，また同じクラスのＧさんやＨさんも３年生になり教室に入るようになった。ＧさんやＨさんは昼休みなどに相談室に顔を出し，Ｂさんと話をする程度となった。

１）．Ａ先生のＢさんに対する関わり

３年生になりＡ先生は無理にＢさんの腕を引っ張り教室に連れて行こうとしたことがあり，それを機会にＢさんのＡ先生に対する印象はより悪くなっていったように思われた。

そしてＢさんはＡ先生がいつものように相談室を訪れ出て行ったあとにSCに対し「Ａ先生のことは嫌い」と初めて言葉にした。ＢさんがＡ先生のことを苦手に思っていることは当初から感じられたが，それをどのように伝えるべきか迷っていた。SCとＡ先生の関係性が出来ていないという認識がSCにはあったためであり，そのことを伝える事，伝え方によっては今後の協働体勢を築くことが難しくなると思われたためである。

SCはＢさんが養護教諭のＣ先生との関わりの中でも同じようにＡ先生のことを話しているだろうと考え，保健室に行きＣ先生との相談の時間を持った。そしてＡ先生とＣ先生との関係について話し合った。その後Ｃ先生の方からＢさんの気持ち，「嫌い」と言っていることをＡ先生に伝えられた。SCから依頼したものではなく，Ｃ先生の判断によるものであった。

その後Ａ先生のＢさんに対する関わりは一方的で強引のように見えたものとは変わり，Ｂさんの心情に配慮したものと変わっていった。

2）．Dくんの相談室での様子

教室ではアニメのキャラクターの絵を描き，それらが描かれたノートの切れ端は制服のポケットに詰め込まれ，ポケットは膨らんでいた。また関連する週刊雑誌の切り抜きなども同じようにポケットに詰め込まれていた。3年生になり将来の進路を考える時になりA先生からの依頼があり休み時間に面談をすることになった。

中2の時はA先生からDくんについてSCへの働きかけは無かった。初めはA先生に連れられて相談室に来るが，その後は1人で休み時間の初めに来るようになった。しかし相談室に来ても自分から入ってくることはなく相談室の前で落ち着かない様子で立っていた。隣の保健室からC先生が声をかけてくれることがあり，初めて相談室に入ることができた。その後はSCが時間を見て相談室の前で待つようにし，招き入れた。相談室に入るとSCが勧めた椅子に座るが左足は曲がらない。こちらが話しかけると目はあわせるが言葉を発しない。しかし微妙に目と首は動かし，違うという返事の時には横に動いているように見える。まずは「どこの小学校出身」などと聞くが返事はないため，筆談を試みる。しかし書いてもくれないため，選択式で丸をつけてみるように伝える。しかしそれも答えない。その後SCが選択肢を指し示し顔を見ながら「○○小？□□小？」などと尋ねると首の動きから○○小とわかる。これがはじめてのコミュニケーションとなる。そして昼休み後は教室まで一緒に歩いて送る。SCが一歩前を歩き時々振り返るが，やはり左足は曲がらずにゆっくりと歩く。

そしてその後も毎週休み時間にはドアの前に立っている。ノックもしないが，ドアの隙間を少し空けておくとそこから顔が少し見えることもある。入ってきても左足を伸ばしたまま座る。SCはDくんが好きなアニメのキャラクターについて質問をするようにした。SCは事前にキャラクターの勉強をして「○○と□□は姉妹なの？」など尋ねるが，言葉でも動作でも明確な答えは得られない。

しかし次の週には週刊雑誌から切りとったキャラクターの家系図のようなものを持ってきてくれる。「前回のことを覚えてくれていたんだね」とSCから話しかけても反応はない。毎週このようなやりとりが続き，休むことなくDくんは相談室に来るようになった。

しかし，Dくんはクラス内の他生徒とぶつかったことをきっかけに1週間程度登校しなくなる。A先生の働きかけがあり登校できるようになったものの，不登校中に切った髪型が気に入らなかったためか帽子をかぶって登校する。学校内で帽子をかぶることを禁止されると，次の日にはYシャツを2枚重ねできて，一枚を頭が隠れるほど上にあげて隠しながら相談室登校をする。

3）．BさんとDくんの関係

この頃Dくんと同じクラスであるBさんは朝から夕方まで登校しており，SCとDくんの昼休みのやりとりは横で見ている。SCはBさんに対して「Dくんはどうやったら話してくれるかな」などと意見を求める。Bさんはそれを受けDくんにSCと同様に筆談などで働きかけるが効果がない。しかし，SCはBさんとDくんの関わりもBさんの教室復帰に役立つのではないかと思い，意図的に交流を持たせるようにする。Bさんが同じクラスのGさんやHさん，そして下級生のIさんと持てなかったような関係，常に自分があわせざる得ない関係とは別の関係を持てること，Bさんが場面緘黙であった1年時を思い出し，現在の成長を実感できると考えたからである。

4）．A先生とDくんそしてDくんの母とのかかわり

A先生はDくんとの母親との連絡は必要最低限のものしか2年生の時点では取っておらず，連絡をしても電話に出てもらえず，小学生の弟が電話に出ていた時には母は具合が悪いと言われる日々が続いていた。中1の時の担任との衝突から始まった学校に対する不信感，ならびに母自身の心身の不調もあったものと思われる。その後個人懇談の時期になり母が学校に来ることになる。

SCは関係改善の機会と考え，同席させてもらえるようにA先生に依頼し，Dくんの母にもA先生が了承を得た。そして実際に面談となり，Dくんの母・A先生・SCの三者での面談が行われた。面談が始まるとA先生の発言に対して「それは学校が何とかしてくれることですよね」と母は切り返し，それに対してA先生が言い返すというやりとりが始まる。そこでSCが間に入り，Dくんの将来のこと，今後どのように生活をしていくのか，母親から離れて生活する時期になるまで何を身につけるべきか，などについて話したいと伝える。

学校と保護者は協働体制を作り，子どもにとって何が必要かを考えるチームであることを伝える事が目的であった。A先生は隣でSCとDくんのお母さんとのやりとりを聞いていた。

面談後の別のSC勤務日には，Dくんの母親と電話をする時にどのようなことを意識して話すことが必要であるかについての助言をA先生から求められるようになる。その回数はその後徐々に減るものの，A先生はDくんの家庭に電話で連絡をとっているようであった。

後日全国一斉学力テストが行われ，Dくんはテスト自体には答えなかったが，最後の日常生活のアンケートについての選択式の回答であれば答えていた。このことを次のSC勤務日にA先生は笑顔で嬉しそうに報告してくれた。そしてそれをきっかけに交換日記のようなものを

始めたこと，それにより今までわからなかったＤくんの生活の状況がわかるようになってきたことを報告し，ノートを見せてくれた。SC はそのノートを基にＤくんとの昼休みの面談を行った。筆談に関しては２年生の時点でもＡ先生は試みてはいるが失敗したということであった。

５）．その後の生徒たち

Ｂさんは修学旅行に参加することを目標に置き，休み時間に訪れるＧさんやＨさんにも引っ張られるような形で教室に復帰し，修学旅行にも無事参加することが出来た。その後学校内で SC と顔を合わせても避けるようになる。

Ｄくんは左足が曲がらない件で母親に連れられ整形外科を受診したが，異常は見つからず，児童精神科を紹介され特別支援学級への転校を勧められた。母親は当初は特別支援学級の立地の関係で転校へ抵抗を示していたとのことであったが，最終的には３年生の２学期には転校し，その後特別支援学校の高等部へと進学した。転校先の学校ではこれまで見られなかった笑顔も見られていたるようである。

３．Ａ先生の変化（担任教師へのインタビューより）

１）．担任を持って考えたこと

まずＢさんやＤくんを担任することになった時の思いについては以下のように語られた。

> *受け持つということになったときに　自分で　いや　こういう風にしなきゃなっていうイメージは　全くなかったというか　いや　考えていたのかもしれないけど　具体的にこういう風にしなきゃなっていうのは　きっとイメージ的には　その　一生懸命関わってやろうというイメージが一番強かったと思うんですよね。　そういうこう反社（反社会）の子たちとくらべると　逆に　こう　たぶん　なんらかの　自分が　関わっているよということ示してあげれば少しかはこう　答えるものもあるんじゃないのかなって　反発されるわけでもないし　まあ自分がどの程度こう関わっていけるのかは分からなけども　関わっていってあげなきゃな　というぐらいの思いしかなかったと思いますね。*

一生懸命関わることが，何らかの良い影響をＢさんやＤくんに与えられると考えていたことが伺える。次に担任を持つ以前の教員になりたてのころに考えていたことを尋ねた。

> *自分の中では教員になった理由っていうのは　(生徒と)会話をして関わっていく中で，その子をどうやって　変えていけるかっていうのは　そのなんていうか　教員の自分がやりたかったことというか　その　できる　ことをこの子にとってしてあげたいっていう　それは　自分は会話をする中で　この子は何を考えてて　自分は　何　どういうことを思っててというのを　伝え合うっていうのが　すごく大事なことだと思ってたので（略）*

生徒と教師のあいだで様々なことを伝えあう手段として，会話をするということがＡ先生にとって教師のあり方の理想であることがわかった。さらにＢさんやＤくんのように会話ができない子へ向き合った時の戸惑いが大きかったことが推測された。

2）．Ｂさんについて

Ｂさんや，不登校生徒一般に対して持っていたイメージが語られた。

> *Ｂはすごく教室に入るのを拒んでて　入ったときに思ったのは　やっぱり入ったら何でもないことじゃんって思ったんですよね　まあ　それはずっと思ってたと思うんですよ自分の中で　不登校の子は全般そうなのかもしれないですけど　きっと入ってしまえば何とでもなるんじゃないかなっていうのを　それをなんかこう　すごい壁のように感じてて　それってそんなに大きな壁じゃないよ　入れてあげたら違うんだよ　っていうのは自分の中にはあったんですよね　ずーっと　だから　入ったときにも　やっぱりそうでしょ　ほらねっていうイメージの方が強かったと思うんですよね　うわ　やった　っていうのも勿論あって（略）*

不登校生徒は入ってしまえば何ともないと考え，とりあえず入ってしまえば何とかなるという考えが見られた。特にＢさんに関しては入ってしまえば後はうまくやっていけるのではないかという期待を持っていたように思われる。

つぎにＢさんと同じクラスのＧさんを比較して次のように語られた。

> *Ｂの方がよっぽど　なにもしなくてもそのまま（教室に）入っていけるんじゃないかなっていう　本来ならば不登校っていうのは　Ｇみたいな　ちょっと　こう　周りから攻撃されるという自分のイメージの中では多いと思うので（略）*

ここではＧさんの特徴を把握し，比較するとＢさんは問題がない，教室に入れば何とかなるという考えが感じられた。不登校生徒一般に対する固定的なイメージというものを持っていたと思われる。このことにより不登校生徒イメージとは異なるＢさんの教室復帰への期待が強まり，Ｂさんを強引に教室へ行かせようという関わりにつながったものと思われる。

さらにＢさんと関わり始めた時期を振り返り次のように語られた。

> *最初はもういかんせんこう自分が何とかするしかないという思いと　自分が何とかするためには自分の思いを伝えるしかないという思いが俺の中では強かったんですよね*

ここではＡ先生が理想とする教員としての関わり方を実行しようという意志の強さが伺える。

その後ＢさんがＡ先生を避けるという展開となり，Ａ先生が理想とする会話をして関わる，伝えあうという関係とは異なるものとなった。その後養護教諭のＣ先生の関わりがありＡ先生にＢさんの気持ちが伝えられた。

Ａ先生はその後のＢさんの教室復帰を支援する過程を振り返り，「Ｂのことを理解しようとするようになったのかな」と語り，SC が「今までと違う？」と質問をした後に以下のように語っている。

> *もちろん理解しようという思いはコミュニケーションをとるうえでは大事なので自分としてもあったんですよ。でも理解するためには言ってくれなきゃと分からない　というのが俺としては強かったので　何で行ってくれないんだよという関わりしか　してなかったんですよね：：：　・・・（略）・・・　ただそれを（Ｃ先生に）教えてもらったというか　いろんな兆候でというか　顔色だとか　まあ　そういうところで　それこそきっと鈍感だったのかなと思うんですよね。自分としては　そういうところはすごく一方的な人間だったのかぁ　というのを気付いて*

Ａ先生は自分自身の理想を追求するあまり，自らの方法で生徒を理解するということに固執していたことに気づくことができ，生徒理解の方法を柔軟に変更できるようになっていったものと思われる。

3)．Ｄくんについて

つづいて場面緘黙であったＤくんについて次のように語られた。

> *最初のイメージとしては　何とか　会話できるまでは　行けるんじゃないかなって　思ってたんですよね　最初に（Ｄと会話ができたことを）夢で見たっていうのもあったけども　　あの　イメージとしては　だぶん　最初の段階が　なにも甘い考えっていうか　関わってなかったていう部分で　なんか　いや　一生懸命，一生懸命伝えれば　どっかでぽっと返ってくるんじゃないかなっていう　なんがなんとなくまだその甘かった部分　があって　思ってたんですよね　　だからホントにひたすら　いいんだぞ　俺とだけは喋ってもいいんだぞって　一生懸命　自分とＤとの関係を作っていこうと（略）*

Ｄくんは３年生の２学期に転校することとなったが，それ以前にＡ先生は質問に対するＢのわずかな反応（首の動きや目の動きなど）で Yes,No を判断することが出来るようになっていた。そして次には筆談が出来るようになる。筆談が出来るようになったことを振り返ってＡ先生は次のように語った。

> *あれがそうですね　今考えてみれば　　なんか一つのキーポイントだったのかな　っていうのは　筆談っていう意味では　　その　うなずくとか　こう　首ふるっていうのは　ただ根気よく　ずっと一生懸命やっていったら　何となくそれがＤに伝わっていったかなというのはあるけども　確かに筆談しようっていうのを　まあ最初はそれこそ　やったんですよね　最初っから　やってみようと試みて何回もやったことがあるんですけど　　でもそれが全く反応はなかったので　ペンを握ろうとしなかったし　　あ　これダメだなっていうのは　　「やってみてたんですね」　そうですね　２年生の時　それこそコミュニケーションを取らなければどうしようもないというのが自分の中にあったので　　しゃべれないんだったら書けよというのは　ただひたすら　こう　言い続けていたこではあったと思うんですよ。　ただそれを何回かやったけれども　反応が全くなかったので　きっと諦めていた部分ではあったと思うんですよ　それは無理だなと思って（略）*

つづいてＤくんと筆談をするようになったことを振り返って以下のようにコミュニケーションの大切さを再認識している。

> *いやすごくほんとコミュニケーションって大事だなと　筆談ができるようになって　いろんなあいつの生活が分かるようになった　すごい大きかったなっていう*

Ａ先生が担任を持つ生徒が不登校状態ではなくなったことについての達成感について尋ねた。Ｄくんとは結果的に会話をすることで伝えあうということができず，Ａ先生の理想の教師と生徒との関係とは一致していない。これらの点を伝えた後に以下のように語っている。

> *結果的にだからＤに関していえば，俺が求めてるというか，自分が求めてるわけじゃないですけど，その　コミュニケーションをきちっと取って，彼にとって，すごく　あの　いいものを何か得るっていう意味では　達成はしてないと思いますけど　少し階段を登らせることができたという意味では　ある意味達成感はあるだろうなと思ってるんですけど。　・・・(略)・・・悔しいなという思いは勿論ありますけど，達成感の方が強いかな彼の場合は*

コミュニケーションの重要性を認識したとの語りと，Ａ先生が求めていたコミュニケーションについての語り

における，コミュニケーションという概念の意味するところが異なっているように思われる。このことからＤくんとの関わりを通してＡ先生のコミュニケーションという言葉のとらえ方が広がっていたこと推察された。

4)．二人への関わりを比較して

またＢさんとの関わりに関してはＤくんと比較して以下のように語られた。

正直なところＢに関していえば　何考えてるのか今の時点でもきっと　まだまだわかってないというか　なんで　あんな風になったのかも自分としては　わからないし　ぽっと入って　自分でこう生活していてる中でも　あの　ここで（相談室）いるときと違って　まあ　もちろん沢山得るものはあるなと思うんですけど　そこでこう　彼女が　ん：：：　なんというか　どうプラスになっていっているのか　彼女自身がどういうふうに成長していくのかっていうところは　何も助けてあげられないだろうな：：：っていうか　それこそ　俺が思い描いている　その生徒と教師の　関係で　うまくこう　自分の人生において　こう　プラスになるようなことを少しでもしてあげれてるかっていうと　まあ，もちろん教室に入ったということは大事なことで　その関わって　これから関わっていかなきゃいけないと思うので　そういう意味ではプラスになってるかなとは思うんですけど，　まあ実際　なに，これをしてあげれたなっていうか　その　彼女の今後の生活において　ん：：　ま　他の子とは違うんで。　それこそＤの時とは目標が違うっていうのと一緒だとは思うんですけど　何もしてあげられてないな：：：っていう思い　思いとして　ん：：：（略）

続けて，今後のことを語る中で「それぞれがそれぞれの道を歩んでいくための一助になっていたのかなという自分の振り返りの部分でもある」と語られた。

Ａ先生は理想としていた教師と生徒との関係をもとに生徒を支援できなかったという現実を認めつつも，生徒の成長を実感しているように伺える。

Ⅳ．総 合 考 察

本研究はSC個人がＢさんやＤくんとどのように関わったのかという事実以外に，Ａ先生とＢさんやＤくんとの関わり，Ｂさんと他の生徒とのかかわり，Ａ先生とＤくんの母親との関わり，Ａ先生とＣ先生の関わり，そしてそれらをＳＣがどのようにつなごうと試みたかについて記述したものである。

ＢさんはＧさんやＨさんＩさんＤくんなど他生徒やSC，Ａ先生やＣ先生との関わりの中で何を感じたのか，Ｄくんは筆談をするようになり転校に至り，その後何を考えているのか，これらのことは本人に現時点で確認することではないのかもしれない。しかし何らかの変化が起こったことは事実である。

現在多くの学校ではSCの勤務は週一日程度と限られた時間であり，その中でできることは限られてくる。しかし同時に学校というコミュニティに入り込んでいるからこそ，様々な人と関わる機会が得られる。

だからこそ，それらをつなぎ合わせることで，個人が様々なことを感じ，成長する機会を作り出すことができるものと思われる。

また新人教員が不登校生徒や対応に苦慮する生徒との関わりの中で変化していく可能性が示唆された。教員養成の課程で，教員として児童生徒への関わり方の理想や，不登校生徒や配慮を必要とする児童生徒についてのイメージというものは形作られると思われる。

しかし現実にはそれらのイメージ通りの児童生徒ばかりではなく，個々の特徴はさまざまであり，またそれぞれの児童生徒への対応は教員が理想としていたとおりに進むとは限らない。その中で現実を受け入れつつも，柔軟に考えを変化させること，他職員との良好な関係の基に支援しあいながら児童生徒と関わることが必要とされるのではないだろうか。

このことは教員のメンタルヘルス保持のためにも欠かせないことであり，結果的には不登校児童生徒や配慮を必要とする生徒への支援につながるものと思われる。

最後にＡ先生が養護教諭のＣ先生からのアドバイスや，ＢさんＤくんＧさんとの関わりを通して試行錯誤の結果，生徒の変化が生み出されたものと考えられることが重要であろう。教師がほどよい自己肯定感を持つことが，SCの存在が無くとも学校というコミュニティが機能するために重要だと思われる。そしてSCは心理臨床家としてコミュニティ内に存在しているようで存在していない，あるいは存在しているようで存在していない「つなぎ手」となれることが理想ではないだろうか。

付記

本研究は，北方圏学術情報センター研究費（平成18年度）の助成を得て実施された。

引用文献

1）文部科学省：文部科学省統計（2010）
2）落合美貴子：教師のバーンアウト研究の展望，教育心理学研究，51（3），351-364（2003）
3）伊藤美奈子：保健室登校の実態把握並びに養護教諭の悩みと意識―スクールカウンセラーとの協働に注目して―，教育心理学研究，51（3），251-260（2003）
4）野村直樹：ナラティヴとは何か，江口重幸・斉藤清二・野村直樹編　ナラティヴと医療，pp.11-30,金剛出版（2006）
5）村瀬嘉代子：治療者に求められるもの―「つなぎ手」として―，子どもと大人の心の架け橋，pp.30-39,金剛出版（2009）
6）西條剛央：生死の境界と「自然・天気・季節」の語り―「仮説継承型ライフストーリー研究」のモデル提示―，質的心理学研究，1,55-69（2002）

Approaches of a teacher to school refusing students

Takanori Shinkawa（Hokusho University）

Abstract

Approaches of a junior high school teacher to school refusing students in his class were examined. It was the first time that the teacher had taught a school refusing students. The involvement of the teacher, school counselor, and students, as well as interviews with the teacher was analyzed. Results suggested a transformation in the ideal relationship between the teacher and students, as well as in the image of school refusing students. Furthermore, the effectiveness of support for the new teacher that worked as a school counselor with another teacher was suggested.

Key words：school refusal, new figure teacher, school counselor, collaboration, school nurses